小松浮立の由来について

小松神社：祭神（平重盛【たいらのしげもり】）
源氏が滅んだ後の北条氏の世に建立されたと伝わる。

元暦 2 年（西暦 1185 年）今からおよそ 825 年ほど前、栄華を誇った平家一門もあえなく壇ノ浦にて源氏との戦に敗れ、海のもくずと消えてしまいました。
壇ノ浦の戦いで生き残った平家の落人たちは数船にわかれ、海岸づたいに南下し、九州の山々をさまよい逃亡をつづけ、永い日数をかけて落人の一部の人たちは、筑後川沿いを下り、今の蓮池町小松に土着し、永住の地と定めました。
漂着した人たちは、平清盛（たいらのきよもり）の嫡男（ちゃくなん）・平重盛（たいらのしげもり）を租とする小松十兵衛一族約 136 名と伝わっています。
当時、荒れはてていた地を田畑に開拓し、源頼朝（みなもとのよりとも）の目をのがれて、身をひそめた生活を続けておりましたが、
永久元年（西暦 1219 年）、源氏が滅んだ後、土着していた落人たちは、平清盛の嫡男で、人徳の高かった、先祖にあたる小松内大臣（こまつ・ないだいじん）・平重盛（たいらのしげもり）公をしたい、小松神社を建立し、重盛（しげもり）公を小松大明神（こまつだいみょうじん）として祀（まつ）り、心のよりどころとしました。
また、地名を重盛（しげもり）公の別名である小松の郷（さと）と改めためました。
神社建立以降、落人たちは、重盛（しげもり）公の遺徳（いとく）をしのび、五穀豊穣（ごこくほうじょう）を願い、農耕の暇な春秋二回・日（現在は不定期になっています）を選び、神前にて、浮立を奉納してきました。
これが、「小松浮立」のおこりです。
しかし、小松浮立の根源は、ここで新しく発祥したものではありません。
平家一門が栄華をきわめていた時代、平清盛（たいらのきよもり）が宋（そう）との貿易を盛んにするために今の兵庫県に港を大々的に築港し、築島を築きました。
この築島の工事の際、海が荒れてどうしても工事がはかどりませんでした。
清盛（きよもり）は、これは海の神・龍神（りゅうじん）の怒りに触れていると見なし、この龍神（りゅうじん）の怒りを解くために、当時の楽器である太鼓やカネではやしたところ、龍神（りゅうじん）の怒りも静まり、みごと築島が完成したと云われております。
その後、平家一門の人々は、築島築港（ちくじまちっこう）の音頭（おんど）を、館（やかた）の建設や、住居の新築に演奏し、無事完成を祈願するのが、ならわしとなりました。
これが、小松浮立の源（みなもと）であり、別名、「築島浮立（ちくじまふりゅう）」と云われております。
また、この浮立の楽器には笛がなく、一名「笛なし浮立」とも云われております。
これは、源平の戦いの中の「一ノ谷」の合戦で、16 歳の若武者・平敦盛（たいらのあつもり）が、日頃愛用していた青葉の笛を落とされ、探しに戻ったところ敵将（てきしょう）・熊谷次郎直実（くまがいじろうなおざね）と渡り合い、討ち死にしてしまいました。
そのため、浮立演奏の時には笛の使用を禁止し、笛なし浮立として、そのまま今日に受け継がれております。
小松部落では、現在でも神社へ奉納された後、地区内の新築の家々にも、浮立を演奏してまわります。

この小松浮立は、昭和 42 年 2 月 11 日に、佐賀市指定文化財に指定されました。